研究論文

豊前南部方言の終助詞「じゃら」の意味と機能

On the grammatical meaning and function of the final particle *jara* in southern Buzen dialect

松　岡　雄　太
Yuta Matsuoka

In this paper, I considered the meaning and function of a grammatical form *jara* used in the southern region of the Buzen dialect. I concluded that *jara* is a final particle that expresses a negative modality for the listener, and its meaning is that actively replacing the listener's (in the case of soliloquy, the speaker himself) existing knowledge with the speaker's new one. In addition to this point, the speaker can only use *jara* in the same place where he/she gained the new knowledge. The remaining task of this work is to clarify the difference between *jara* and the other sentence ending forms which have similar modal meanings in the Buzen dialect.

キーワード
Buzen dialect, final particle, modality

1．はじめに[1)]

福岡県の方言分布は、概ね江戸時代の藩（古代の国）の区画と一致し、大きく福岡市を中心とする筑前（西部）方言、久留米市を中心とする筑後（南部）方言、北九州市を中心とする豊前（東部）方言の三つに分かれる（次頁の【図１・２】を参照）。

豊前方言は東京式アクセントを有している点、筑前方言や筑後方言で使われる文末詞「ばい」「たい」が用いられない点など、一定の特徴が見られる（平山［編］1997: 42–46 など）。本稿はこの豊前方言の南部地域[2)]でのみ用いられる「じゃら」の意味・用法について論ずる。「じゃら」とは、例えば、次の（1）のように用いる形のことである[3)]。

●図１　九州方言の３区分と福岡県

●図２　県下方言区画図

【図１・２】九州方言と福岡県方言の区画（平山［編］1997: 2）

（1）［風呂上がりの夫に対して妻が言う］

　しゃつが　うらおもて**じゃら**。

　〈シャツが裏表だよ〉

従来の豊前方言の文法について記述した諸先行研究の中に、上のような「じゃら」の存在に言及したものは管見の限りない（加来 1953 頃、吉町 1961、岡野 1983、岡野 1991 など）。またこの「じゃら」のみを単独で、あるいは意味の似た他の形式（例えば、「やん」、「ばい」、「たい」など）と比較するなどして取り扱った研究も筆者が知る限りない。では、「じゃら」は、比較的最近できた新しい方言形かと言えば、そうではなく、言語コンサルタント A 氏の祖父母（祖父は 1934 年、祖母は 1937 年生まれ）も普通に使っているというから、少なくとも昭和初期くらいからは既に存在していたものと考えられる。

ところで、「じゃら」はその語形だけを見ると、東日本の東海地方の方言などに見られ、今では東京方言でも多用される「じゃん」（ではない、じゃない）に似ている[4)]。しかし、概ね「じゃん」に相当する豊前方言の文末詞には「やん」という形がある[5)]。実際、「やん」と「じゃら」は意味・用法に似ているところがあり、（1）の例に関してのみ言えば、「じゃら」を「やん」に置き換えることも可能である。しかし、「やん」と「じゃら」は、いつでも置き換えが可能なわけではない。また、言語コンサルタントの直感によると、「やん」と「じゃら」の間には細かな意味の違いがあり、（1）の場合、「じゃら」には、聞き手に対する非難（そうじゃないだろ！）、小馬鹿にしたようなニュアンス（何やっているんだ、お前は！バカか！）のモダリティが含まれるという。

また、言語コンサルタントの指摘によると、「じゃら」が使える相手は、通常、年齢が同じ、ないしは目下に対してのみであり、同年齢や目下であっても、親しい間柄でなければ、普通は

使わないという。この指摘は、上述したように、「じゃら」の使用が、非難や相手を小馬鹿にしたようなネガティブなニュアンスを伴うこととも通ずる。

だが、この点は、厳密に言えば、年齢より親しさに関する制約だと考えられる。以下の（2）は相手が年上であっても、親しい間柄であれば、「じゃら」が使えることを意味している。

（2）［太郎と次郎は兄弟。次郎が自分の祖母に電話をかけた］

次郎：あ　ばーちゃん。おれやけど。

〈あ、ばあちゃん？　俺だけど〉

祖母：おー　たろーかえ。

〈おお、太郎かい？〉

次郎：なん　いーよん。おれ　じろー**じゃら**。

〈何言ってるの。俺、次郎だよ〉

2．統語的特徴

「じゃら」には統語的（シンタグマティック）な特徴がある。「じゃら」は、（1）や（2）に示したような名詞の後ろ以外、動詞や形容詞の後ろにつけて使う場合、「じゃら」との間に準体助詞「ん」を入れる必要がある。

（3）［父が横になってテレビを見ながら、目をつぶっている。もう寝ているものと思い、私はテレビを消した。その瞬間、父が言う］

＊みよる**じゃら**／みよ<u>ん</u>**じゃら**[6]。

〈見てるんだよ〉

（4）［私は姉と二人でこたつに入っている。私は暑いと思ってスイッチを切った。すると姉がまたすぐにスイッチを入れた。その瞬間、私が言う］

＊あつい**じゃら**／あつい<u>ん</u>**じゃら**。

〈暑いんだよ〉

ただし、形容動詞の場合は準体助詞を入れなくても言える。

（5）［太郎が友人とテニスをしている。太郎は長年テニスをやってきたのでかなりの実力者だが、友人はまだあまり上手ではない。ラケットの振り方がまずい友人に太郎が言う］

その　ふりかたやったら　{a. だめ**じゃら**／b. だめな<u>ん</u>**じゃら**}。

〈その振り方だったら、駄目だよ〉

（5a）と（5b）の違いは、（5a）は太郎が初めて友人のスイングを見たときの発言、（5b）は太郎が既に何度も友人のスイングを見ていて、場合によっては既に何度か友人に指摘をしているのに、なかなか友人のスイングが改善されないときの発言、である。この（5a）と（5b）に相当する違いは、名詞の場合でも同様である。先の（1）を「裏表な**んじゃら**」と言うと、（5b）に相当する状況を想起させる。

また、「じゃら」は丁寧形（です・ます）と共起しない。この点は上述したように、「じゃら」が親しい相手にのみ使えることとも関係していると思われる。

（6）［太郎と次郎は兄弟。次郎が自分の祖母に電話をかけた］

次郎：あ　ばーちゃん。ぼくです。

〈あ、ばあちゃん？　僕です〉

祖母：おー　たろーかえ。

〈おお、太郎かい？〉

次郎：＊なん　いーよんの。ぼく　じろーです**じゃら**。

〈何言ってるの。僕、次郎ですよ〉

以上、（3）～（6）で見たように、名詞・形容動詞には直接つけられるが、動詞・形容詞の場合は名詞化する必要がある点、また丁寧形と共起できない点などは、いわゆる「のだ」文を想起させる[7]。しかし、結論から言えば、「じゃら」は「のだ」とは異なる。

（7）a. 食べるのだが／＊たべるん**じゃら**が〈逆接〉

b. 食べるのだから／＊たべるん**じゃら**け（ん）〈理由〉

c. 食べるのか？／＊たべるん**じゃら**か？〈疑問〉

d. 食べるのよ／＊たべるん**じゃら**よ〈確認〉

e. ＊たべよー**じゃら**〈意向〉

f. ＊たべれ**じゃら**／＊たべろ**じゃら**／＊たべり**じゃら**〈命令〉

まず、（7a）、（7b）のように「のだ」は主節以外に従属節でも用いられるが、「じゃら」は従属節で用いることができない。また、主節の場合も、（7c）や（7d）のように「のだ」は終助詞と共起できるが、「じゃら」は終助詞と共起できない[8]。そして最後に、（7e）や（7f）が非文になるように、「じゃら」は意向形や命令形といったモダリティとも共起しない。

次に、「じゃら」と「のだ」との違いは、テンスや否定のしかたにもある。「のだ」はそれ自体を活用させてタ（過去）形や否定形にすることができるが、「じゃら」はこのような活用ができない。

（8）a. いくのだ／いったのだ／いったのだった
　　b. いくん**じゃら**／いったん**じゃら**／＊いったん**じゃら**った
（9）a. いかないのだ／いくのではない
　　b. いかんの**じゃら**／＊いくん**じゃら**ない

このように「のだ」と「じゃら」は統語的には全くの別物だと言える。何より「のだ」の意味・機能は非常に多岐にわたるのに対し、「じゃら」の意味は非常に限られている。以上のことから、「じゃら」は「よ」や「ね」と同様、モダリティを表わす終助詞のひとつだと見なすのが妥当である。

なお、「じゃら」は「名詞＋助詞」のあとでも使える。

（10）［今は7月1日］
　　友人：なつやすみっち　いつからやったっけ。
　　〈夏休みっていつからだったっけ？〉
　　私：はつかから**じゃら**。
　　〈20日からだよ〉

また、動詞や形容詞の活用語尾のあとでも使える。

（11）［子供は小学6年生。スマホを買ってほしいとねだる子に向かって、母が言う］
　　ちゅーがくせーに　なってから**じゃら**。
　　〈中学生になってからだよ〉
（12）［テニスのダブルス試合。太郎は次郎とペアを組んで出場し準決勝まで進んだ。このままいくと決勝で当たるのは、なんと同じサークルの三郎・四郎ペア］
　　次郎：けっしょー　さぶろーだちとやん。
　　〈決勝、三郎たちとじゃないか〉
　　太郎：じゅんけっしょー　かったら**じゃら**。
　　〈準決勝に勝ったらだよ〉

最後に、シンタグマティックな関係を見たとき、「じゃら」はその後ろにさらに「え」をつけて「じゃらえ」ということもできる。例えば、冒頭の（1）を例にとると、「裏表じゃらえ」のようになる。この「え」は標準語の「い」に相当する文末詞と考えられる。ただし、この「え」は老齢層にのみ見られ、今回の言語コンサルタント2名を含む若・中年層はすでに使わないという。

（13）a. きょーわ　{かよーかえ／＊かよーだえ}。
〈今日は火曜かい〉
b. じろーわ　もー　がっこー　いったかえ？
〈次郎はもう学校に行ったかい？〉

3．意味・機能

上述のように、「じゃら」には、聞き手に対する非難（そうじゃないだろ！）、小馬鹿にしたようなネガティブなニュアンス（何やっているんだ、お前は！バカか！）のモダリティが含まれる。これまでに挙げた用例はすべてこのモダリティと合致している。その証拠に、以下の（14）は、単なる Yes-No 疑問文の会話であるが、このような Yes-No 疑問文の返事で「じゃら」を用いると、何の前触れもなくけんかをしかけているようなニュアンスを帯びるため、極めて不自然である。

（14）友人：たろー　おまえ　ひるめし　くった？
〈太郎、お前、昼ご飯食べた？〉
太郎：おー　もー　{くったよ／＊くったん**じゃら**}。
〈ああ、もう食べたよ〉

言語コンサルタントの直感を勘案しても、「じゃら」の使用にネガティブなモダリティが伴うのは事実である。だが、「じゃら」は必ずしもこうしたネガティブなモダリティを発動しなければならないわけではない。

（15）［友人と一緒に外食に。私はこの店に何度も来ているが、友人はこの店は初めて。注文して出てきたおすすめ料理を友人に勧める］
これ　うまいん**じゃら**。いーけん　たべてみてん。
〈これ、うまいんだよ。いいから食べてみてよ〉
（16）［私はオレオレ詐欺の犯人。知らない家に電話をかける。幸運にも老婦人が電話に出た］
私：あ　ばーちゃん。おれ　おれ。
〈あ、ばあちゃん？　俺、俺〉
女：おー　たろうかえ？
〈おー、太郎かい？〉
私：そーそー　たろう**じゃらー**[9]。
〈そうそう太郎だよ〉

（17）［私は父の誕生日にプレゼントを買って渡した。父は包み紙を開く］
おー　さけ**じゃらー**。ありがとー。
〈おお、酒じゃないか。ありがとう〉

（15）の場合、友人に純粋にその店のおすすめ料理を食べてもらいたいのであって、その料理が実は食べてみると激辛なのだ、といったいたずら心があって勧めているわけではない。（16）は、先に見た（2）と状況が似ているが、（2）が相手の発言を否定していたのに対して、（16）は肯定している。その口調は優しく、非難したり、小馬鹿にしている感じは相手に知られない[10)]。（17）の場合、父は酒をもらって純粋に喜んでおり、どうせ貰うのなら酒以外がよかったと思っているわけではない。

ここまで見てきた「じゃら」の例はすべて、話し手と聞き手がともに存在する場面で用いられたものであるが、（17）は一種の独り言である。この点に関して、「じゃら」は相手のいない完全な独り言で用いることもできる。以下の（18）、（19）は状況から見てネガティブな意味で用いられたと考えることもできるが、（20）は（17）同様、そうではなかろう。

（18）［今日は遠足の日。楽しみにしていたのに、朝起きて窓を開けると雨が降っていた。独り言］
あーあ　あめ**じゃら**。
〈あーあ、雨だよ（残念！）〉
（19）［ゲームをやっていたらいつの間にか時間が経ってしまっていた。時計を見て、独り言］
あっ　もー　じゅーにじ**じゃら**。
〈あっ、もう十二時だよ（寝なきゃ！）〉
（20）［大学の授業で「言語学」を履修。授業内容は難しく、期末試験もあまり解けなかったので単位が取れた自信はなかった。うまくいっても「可」くらいだろうと思っていた。成績が出て、成績表を見た瞬間、独り言］
おー　げんごがく　ゆー**じゃら**。
〈おお、言語学、「優」だよ（ありえない！）〉

（15）～（20）のような「じゃら」の用法をどのように説明したらよいだろうか。本稿では「じゃら」の機能を以下の（21）のように仮定する。このように考えることによって、「じゃら」がもつネガティブなモダリティ的意味も、（15）～（20）の例も、全て説明することが可能である。

（21）「じゃら」の機能（仮定）
相手（聞き手）の既存知識を自分（話し手）が持っている知識に積極的に書き換えようとする（独り言の場合は、自分の既存知識を新知識に書き換える）[11)]。

（21）の記述に基づいて、これまでの例文を説明すると次の【表 1】のようになる。

例文番号	話し手が想定する発話前の聞き手（独り言だと話し手自身）の知識	書き換えたい話し手の知識
（1）	普通にシャツを着ている	シャツが裏表になっている
（2）	電話に出たのは太郎	電話をしているのは次郎
（3）	もうテレビを見ていない	まだテレビを見ている
（4）	こたつの中はまだ寒い	こたつの中はもう暑い
（5）	この振り方でよい	その振り方ではだめ
（10）	夏休みが何日からかあいまい	夏休みは 20 日から
（11）	今スマホを買う（買いたい）	スマホは中学生になったら買う
（12）	決勝の相手は三郎	準決勝を勝つのが前提 （まだ対戦できるか分からない）
（15）	この料理の味を知らない	この料理はおいしい
（16）	電話に出たのは太郎（孫）だろう（あいまい）	電話に出たのは太郎だ
（17）	（子供が買ったのだから） プレゼントはつまらないもの	プレゼントは自分の好きな酒
（18）	晴れるだろう（晴れてほしい）	雨だった
（19）	まだ 10 時か 11 時くらい	もう 12 時
（20）	成績は「可」か「不可」	成績は「優」

【表 1】「じゃら」が行なっている知識の書き換え

（21）の仮定が正しいとしたら、相手の既存知識を書き換える必要がない場合には、「じゃら」が使えないことになる。実際、以下の（22）のような状況で「じゃら」が使えないのは、相手（後輩）の出身地が福岡であるという事実は絶対的に真であり、その知識を書き換える余地がないためだと考えられる。

（22）［長崎某大学のサークル部屋。新しくサークルに入ってきた後輩が自己紹介で福岡出身だと語った。同じ福岡出身の先輩である私が言う］
そーなん。おまえも　ふくおか　{* **じゃら**／なん／やったん}。
〈そうなの？お前も福岡なんだ／だったんだ〉

また、（21）の仮定が正しいなら、「じゃら」が含意するネガティブなモダリティは、相手の知識より自分の知識が正しいと話し手が思っており、またその正しいと思っている自分の知識を「積極的に」相手の知識と置き換えようとしていることで生まれるとの説明が可能になる[12)]。加えて、先の（14）に挙げた単なる Yes-No 疑問文で「じゃら」が使えなかったのは、想定すべき相手の既存知識がなかったからとの説明も可能となる。疑問文で「じゃら」が使えない点も同じ理由から説明できる[13)]。

だが、「じゃら」の使用にはまだもう少し細かな制約がある。

（23）［話題の提供。会話の切り出し］

私：ほらさー　かんこくごの　くらすに　たろーち　ゆーやつ　おる｛*じゃら／やん｝。

〈ほらさー、韓国語のクラスに太郎っていうやつがいるじゃない〉

友人：たろー？　あー　いっつも　じゅぎょー　おくれて　くる　やつね？

〈太郎？　あぁ、いつも授業に遅れてくるやつね〉

（23）は（21）の条件を満たしているが、「じゃら」を用いると非文になる。（23）では、私は突然「太郎」のことを話題に切り出しており、この発話以前に「太郎」に関する言及はない。（23）の状況で「じゃら」が使えないのは、「じゃら」が「じゃら」を用いる発話へとつづく前提となる知識（相手の発話、ないしはできごと）を必要とするためだと考える。これまでに見てきた「じゃら」が使える例は全てこの前提となるものを持っている。

この点に関しては最後に、以下の（24）、（25）の例も示唆的である。

（24）［私は友人とカフェで話している。友人がスマホを机の上に置いたまま、トイレに行った。そのあいだにスマホが鳴った。友人がトイレから戻ってきた。私が言う］

なんか　スマホ　｛*なりよったん**じゃら**／なりよったよ｝

〈なんかスマホが鳴っていたよ〉

（25）a.［太郎の部屋は2階にある。太郎は今1階のリビングにいる。2階に上がって太郎の部屋の電気がつけっぱなしになっているのに気づいた父が2階から大声で叫ぶ］

たろー　また　でんき　つけっぱなし**じゃら**。

〈太郎、また電気がつけっぱなしだぞ〉

b.［太郎の部屋は2階にある。太郎は今1階のリビングにいる。2階に上がって太郎の部屋の電気がつけっぱなしになっているのに気づいた父がリビングに降りてきて太郎の前で言う］

*たろー　また　でんき　つけっぱなし**じゃら**。

〈太郎、また電気がつけっぱなしだぞ〉

（24）は（21）の条件を満たしており、かつ「スマホが鳴る」という前提的な知識（できごと）もあるが、非文になる。この点に関しては、（25）がさらに示唆的である。（25）も同様に、（21）の条件を満たしており、前提となる知識（「太郎の部屋の電気がつけっぱなしになっている」）もある。しかし、（25a）に見るように、この知識をえた父は、それを知ったのと同じ場面でなら「じゃら」が使えるが、（25b）のように、その場面から間を置いて別の場面に移

ると「じゃら」が使えなくなる。これは「じゃら」の使用に「現場性」が関わっていることを示唆している。このように考えると、（24）が非文になるのは、スマホは、友人がトイレから出てくるまでの間に鳴り止んでおり、別の場面に移ったからだという説明ができる。これまでに見てきた「じゃら」が使える例は全てこの現場性の条件を満たしている。したがって、先の（21）は最終的に次の（26）のように修正する必要がある。

（26）「じゃら」の機能（結論）

前提となる知識（相手の発話、できごと）を受け、その知識をえた同じ場面で、相手（聞き手）の既存知識を自分（話し手）が持っている知識に積極的に書き換えようとする（独り言の場合は、自分の既存知識を新知識に書き換える）。

4．今後の課題

本稿では「じゃら」の意味・機能を中心に考察してきたが、今後の課題として、主に以下の 2 点が挙げられる。1 点目は「やん」「ちゃ」といった意味の似た他の文末詞との違いである。上述したように、「じゃら」は同じく豊前方言で用いられる文末詞「やん」と意味的に重なる部分がある。加えて、「ちゃ」とも意味的に重なる部分がある。以下の（27）は一部「ちゃ」と置き換えが可能な例である。

（27）a.［母親が二階にいる息子を呼ぶ］

母：たろー　ごはん　できたよー。はい　たべりー。

〈太郎、ご飯できたよー。早く食べなさい〉

太郎：まだ　しくだい　{しよん**じゃら**／しよる<u>っちゃ</u>}。

〈まだ宿題しているんだよ〉

b.［母親が二階にいる息子を呼ぶ。呼んでも返事がないので、また呼んだ］

母：たろー　ごはん　できたよー。はい　たべりー。

太郎：* わかったん**じゃら**／わかった<u>っちゃ</u>。

〈分かったよ〉

（27a）は「じゃら」が使えるが、似た状況である（27b）は「じゃら」を使うと非文になる。また、言語コンサルタントによると、（27a）も「じゃら」より「ちゃ」のほうを多用する気がするという。また、以下の（28）に見るように、「じゃら」は「やろ」と置き換え可能な場合もある。

（28）［私と友人は今日学校に来ていないクラスメイト太郎のことを話している］

私：たろー　きちょらんよ。どーしたんやろ。

〈太郎、来てないよ。どうしたんだろう？〉

友人：きのー　かいりに　なんか　さむけがする　っち　いーよったけど。

〈昨日帰りになんだか寒気がするって言ってたけど〉

私：そーなん？　たぶん　かぜ　{**じゃら**／やろ}。

〈そうなの？たぶん風邪だよ／だろう〉

今後はまず、本稿で扱った「じゃら」に加え、このような他の文末詞との比較を通じて、豊前方言におけるモダリティ体系を明らかにしていく必要があるだろう。

2点目は、上の1点目とも関連するが、「じゃら」の名詞志向性についてである。「じゃら」は2章で見たように準体助詞を介することで動詞や形容詞でも用いることができるが、全的に名詞に直接つける場合のほうが多いようである。今後はこの名詞志向性のような現象が起こる理由を説明する必要がある[14)]。

（29）［テーブルの上にケーキが一つ置いてある］

姉：あ　けーき。たべて　いー？

〈あ、ケーキだ。食べていい？〉

私：a. おれが　くーん**じゃら**。

〈俺が食べるんだよ〉

b. おれん**じゃら**／おれのっちゃ。

〈俺のだよ〉

（30）［スマホを探している友人がいる］

友人：おれの　すまほ　しらん？

〈俺のスマホ（どこにあるか）知らない？〉

私：a. そこ　{* あるん**じゃら**／あるやん}。

〈そこ、あるんだよ／そこ、あるじゃない〉

b. そこ**じゃら**／ ?? そこやん。

〈そこだよ／そこじゃない〉

（31）［友人と居酒屋に入って豪華な刺身盛りを注文した。店員が料理をテーブルに持ってきた］

a. おー　すげー。おーとろ　{* はいっちょるん**じゃら**／はいっちょるやん}。

〈おぉすごい。大トロが入ってるんだ／入ってるじゃないか〉

b. おー　すげー。おーとろ**じゃら**／おーとろやん。

〈おぉすごい。大トロだよ／大トロじゃないか〉

（29）の返答は（a）のように動詞を使うことも可能ではあるが、（b）のように名詞に直接つけたほうが自然である。なお、名詞を使う（b）の場合であってもこの状況では「じゃら」よりは「ちゃ」を多用するという。（30）は（a）のように動詞「ある」と使うと「やん」を用いるほうが自然で、（b）のように名詞に直接つけると「じゃら」を用いるほうが自然になる。（31）も（30）の類例であるが、（31b）のように名詞についた場合、（30b）に比べて「じゃら」と「やん」文法性の差が見られない。なお、（29）～（31）は上述した「ちゃ」や「やん」との違いにも関係している。

目下、以上の2点に関する詳細な調査が今後の課題だと言えよう。

注

1）本研究にご協力いただいた言語コンサルタントは以下の2名である。

A氏：1997年生まれ、男、福岡県築上郡吉富町出身

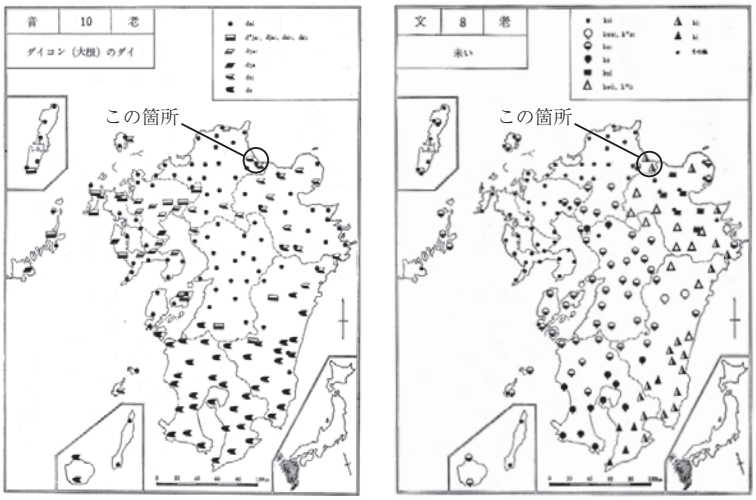
B氏：1972年生まれ、男、大分県宇佐市出身

また、上記2名のご親族の方からも間接的に情報の提供を得た。この場を借りて感謝の意を表します。

2）豊前南部地域とは以下【図3】の地図に示した市町村のうち、専ら旧豊前国の南部、現在は福岡県に入る築上（ちくじょう）町、豊前市、吉富（よしとみ）町、上毛（こうげ）町、及び現在は大分県に入る中津市、宇佐市を指す。本稿が対象とする「じゃら」は専らこれらの地域で使われている。

【図3】豊前南部地域とその周辺図（筆者作成）

同じ旧豊前国であっても、北部の北九州市、苅田（かんだ）町、みやこ町、行橋（ゆくはし）市などで「じゃら」は使わず、旧豊後国に属する大分市でも使わない（コンサルタントＢ氏の配偶者（大分市出身）による情報）。一方で、旧豊後国に属していても、豊後高田市では使うようである（コンサルタントＡ氏の叔母（豊後高田市出身）による情報）。現段階において旧豊後国に入る国東市や山を越えた杵築市などでの使用有無を確認できてはいないが、地理的に見て、「じゃら」は恐らく築上町以南の周防灘沿岸地域に分布している可能性が高いと思われる。なお、「じゃら」の使用地域の北限が築上町であると、すなわち豊前北部と南部の境界が、みやこ町・行橋市（旧・現京（みやこ）都郡）と築上町（築上郡）のあいだにあると判断する点に関しては、九州方言学会［編］（1991）に示されている分布地図の中に、ここが境界線になっているように見える語形が散見されることからもある程度は支持されよう（【図４】を参照）。



【図４】九州方言における「ダイコン（大根）」の「ダイ」（老年層）と命令形「来い」（老年層）の分布（九州方言学会［編］1991: 142, 156）

ところで、筆者（1978 年生まれ、京都郡苅田町出身）は高校時代に、「じゃら」と同じ意味で使っていると思われる形として、築上町（旧築上郡椎田（しいだ）町）出身の同級生が、「やら」と発音するのを聞いたことがある。これは「やん」と「じゃら」が音声的に融合して「やら」になった可能性がある。豊前の北部と南部の境界線にあたるこの地域でこのような混合形が見られるのは興味深い。

3）本稿で挙げる用例は全て筆者が作例し、それを言語コンサルタントに自然になるよう修正してもらったものである。なお、作例にあたっては一部、髙山（2016）を参照した。

4）東京方言の「じゃん」については、松丸（2001）などを参照。

5）「じゃら」を用いない豊前北部では同じような文脈で「やん」や「ちゃ」などを用いる。だが、この「やん」「ちゃ」は豊前南部でも用いられるため、豊前南部では豊前北部よりモダリティをより細分化して表現しわける仕組みを備えていると言える。

6）「みよんじゃら」は「みよるんじゃら」が縮まった形である。

7）「じゃら」の語源は不明だが、名詞（的なもの）のあとにしか来ないことを考えると、もともとはコピュラマーカーの「である」から来ているという、次のような仮説も立てられよう。

「である」／ dearu ／→「じゃる」／ jaru ／→「じゃら」／ jara ／

すなわち、［dea］が音韻縮約を起こして［ʤa］になり、同時に母音の順行同化を起こすと［ʤara］になる。「じゃら」は文法化を通じてできた終助詞の一例と言えるかもしれない。

8）「じゃら」が疑問文で使えないことは、以下の（a）～（c）に示すように、「じゃら」が疑問詞のあとにつかない点からも分かる。

（a）［私はやんちゃな中学生。道で知らないヤンキーに絡まれる。絡まれた私はヤンキーに向かって負けまいと逆に凄みながら言う］

{* なん**じゃら**／なんかちゃ}。おまえ　{* だれ**じゃら**／だれかちゃ}。

〈何だよ。お前、誰だよ〉

（b）［難しいジグソーパズルをやっている。明らかに特徴のあるピースがあった。すぐにははめる箇所が分かりそうなのに、その場所がなかなか見つからない。次第にイライラしてきて独り言］

これ　{* どこ**じゃら**／どこなん／どこかちゃ}。

〈これ、どこだよ〉

（c）［私は友人とペアでダブルスのテニス競技に出ている。試合中、友人が信じられないミスをした。すぐさま私が言う］

* なし**じゃら**／* なしなん**じゃら**／* なしか**じゃら**／なしかちゃ。

〈なぜだよ／なぜなんだよ（＝なぜそんなミスをするんだよ）〉

こうなると、次になぜ「じゃら」が疑問文で（疑問詞とともに）使えないのかという問いも生じるが、この点に関しては後述する「じゃら」の機能が、自分の知らないことについて相手に問う疑問文本来の性質と衝突するためだと考える。

9）言語コンサルタント A 氏によると、この例文の場合、短く「じゃら」というより、「じゃらー」のように語尾を伸ばして優しい感じで言ったほうが自然だという。

10）ただし、（16）は相手をだまそうとしているのだから、表には出していないものの内心は小馬鹿にしたモダリティが含まれていると考えられなくもない。

11）この点については筑前方言の「ばい」や「たい」の意味・機能と似ている（平川 2008、髙山 2016 などを参照）。

12）言語コンサルタント B 氏によると、独り言の場合（（17）～（20）の例）、想定外（期待外れ）になったこと、すなわち、自分の既存知識（そのように思っていた自分）に対する嫌悪感を含意しているように思うと言うが、この点も本稿の記述と矛盾しない。

13）「じゃら」は通常、相手の既存知識を想定していないと使わないと考えられるが、以下の（d）、（e）のように、相手に既存知識がないように思われる状況であっても、「じゃら」を使える例が、多くはないが見つかる。

（d）友人：その　ふく　いーね。どこで　こーたん。

〈その服、いいね。どこで買ったの？〉

私：はかたで**じゃら**。

〈博多でだよ〉

（e）［長崎某大学のサークル部屋。新しくサークルに入ってきた後輩が自己紹介で福岡出身だと語った。先輩である私が言う］

ふくおかなん？　おれも**じゃら**。

〈福岡なの？　俺もだよ〉

上の（d）において通常、友人は私がどこで服を買ったのか知らないと私は思っており、また（e）

において後輩は私が同じ福岡出身だという事実を知らないと思っているはずである。では、「じゃら」を用いると非文になる本文の例文（14）と、用いても非文にならない上の（d),（e）の違いはどこにあるのか。この点に関して、言語コンサルタントＢ氏は、（d）の状況はそれでも何らかの既存知識を相手に認めているような感じがすると述べる。すなわち、友人の発話を文字通りに解釈すると友人は私がどこで服を買ったのかは知らないはずだが、上の（d）の例の場合、友人の発話（問い）を聞き、それに対して私は「俺はだいたいいい服って言ったらいつも小倉で買うし、こいつ（この友人）のことだから、今回もまた俺が小倉で買ったと思っていやがるはずだ」などと邪推し、そして「実は今回は小倉じゃなくて博多で買ったのだ」とその友人の推測（実際は私の邪推）が外れていることを非難しているような感じだという。実際の場面や相手の発話から推論しうる相手の知識状態のみならず、相手の知識状態に対する話者の一方的で勝手な推測までを「じゃら」使用の前提にできるのだとすれば、（e）の場合も、初めて出会ったこの後輩が自分の出身地を知っているはずはないのだが、「他県（この場合は福岡）からやってきたこの後輩は同郷人が周囲にいないことをさぞ寂しがっているだろう」などと私は勝手に思い、かつ「この後輩は今このサークルのメンバーの中に同郷人はいないと思っている」というその知識を書き換えるために「じゃら」を使ったという説明が可能になる。しかし、ここまで来ると、短い例文とその状況背景を設定して言語コンサルタントに尋ねるという今回の調査方法では、なかなかその記述の正しさを証明するのは難しい。違う調査方法を取るか、今回のやり方であればさらに状況背景を細かく設定する必要が出てくるが、この点については今後の課題としたい。

14）この点は、もし「じゃら」が本来コピュラマーカーだったとしたら（注７を参照）、終助詞として文法化したあともコピュラとしての意味・機能が残っているという解釈が可能である。

参考文献

井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎［編］（1999）『日本列島方言叢書 24 九州方言考２ 福岡県・佐賀県』、ゆまに書房

岡野信子（1983）「福岡県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一［編］『講座方言学９── 九州地方の方言 ──』、国書刊行会

岡野信子（1991）「九州方言の各県別解説　福岡」九州方言学会［編］『九州方言の基礎的研究 改訂版』、風間書房

加来敬一（1953 頃）「福岡県方言の語法」『北九州国文』（井上史雄ほか［編］1999: 301-329 に再録）

九州方言学会［編］（1991）『九州方言の基礎的研究 改訂版』、風間書房

髙山彩（2016）「福岡市方言の文末詞「バイ」「タイ」の福岡部若年層における使用実態と代替形式について」『國文研究』61: 126-159.

日本放送協会［編］（1966）『全国方言資料 第６巻 九州編』、日本放送出版協会

平川公子（2008）「福岡市方言における文末詞バイとタイ」『阪大社会言語学研究ノート』8: 116-131.

平山輝男［編］（1997）『福岡県のことば』（日本のことばシリーズ 40）、明治書院

福岡県教育会本部［編］（1975）『福岡県内方言集』、国書刊行会

福田良輔（1961）「九州方言概説」東条操［監修］『方言学講座 第４巻』、東京堂

松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3: 33-48.

吉町義雄（1961）「九州・琉球方言の語彙１ 北九州」東条操［監修］『方言学講座 第４巻』、東京堂